第８章　墳丘出土の遺物

１　概　　要

墳丘からは埴輪類が出土している。出土している埴輪は、円筒埴輪・朝顔形埴輪の円筒埴輪類と、家形埴輪・囲形埴輪やそれにともなうと考えられる木樋・木槽形土製品の形象埴輪類に大別できる。いずれも出土状況図や注記などが残されていないので正確な出土位置は不明である。

埴輪の焼成については、確実に有黒斑と判断できる破片がないことから窖窯によるものと考えられる。焼成の仕上りは軟質なものが多く、現状では須恵質と呼ばれるような硬いものはみられない。胎土は個体ごとにそれほど差がなく、やや密で直径２㎜ほどの砂粒（チャート・白色粒・黒色粒など）を多く含むものが大半を占める。色調は黄橙～黄白色系のものがほとんどで、円筒埴輪には黄白色のものが多く、形象埴輪には黄橙色のものが多い傾向がある。

なお、奥田尚氏による器壁表面にみられる砂礫の観察によれば、埴輪と埴製枕における砂礫種構成は同じ類型に属するもので、紀の川（吉野川）右岸に位置する五條市近内町から今井町に至る範囲でみられるものであるとのことであった。

以下では埴輪の種類ごとに説明していきたい。

２　円筒埴輪類

発掘報告によれば円筒埴輪列は主に墳頂平坦面や墳丘裾において検出されており、そのうちの一部をサンプル的に回収したものと思われる。そうしたこともあってか、円筒埴輪で全形のわかる資料は存在せず、段構成、突帯間隔、透孔の形状など不明な点が多い。図化に際しては、小片に至るまでその対象としたため、現状では接合しない同一個体の破片が含まれている可能性がある点に留意されたい。

なお、発掘報告では墳頂平坦面や墳丘裾以外で竪穴式石槨の北壁から約 1.4 m離れた位置に 25㎝間隔で北壁に平行に設置された円筒埴輪が４個体存在していたことが記されている。取り上げ時の注記などが残っていないため、筆者の憶測に過ぎないが、以下で報告する１～４の円筒埴輪がこの４個体に該当する可能性も考えられなくはない。

また、発掘報告ではこれらの４個体のうち３個体の約 10㎝下方から鉄鏃群、小札甲、帯金具などの遺物が出土したとの記載がある。これらの円筒埴輪の意味として副葬遺物の位置表示および遺物をまもるための施設として使用されたことが指摘されており、注目される。なお、発掘報告ではこのような円筒埴輪の特殊な使い方の類例として奈良県メスリ山古墳や岡山県金蔵山古墳があげられている。

①円筒埴輪（図版 182 ～ 184、第 157 ～ 158 図）

１～４は底部を含む破片である。１は第２段の中ほどまで残存しており、基部付近はほぼ完存している。底径は 27.4㎝で、第１段高は 15.1㎝である。基部は２枚の粘土帯によって成形されており、基部

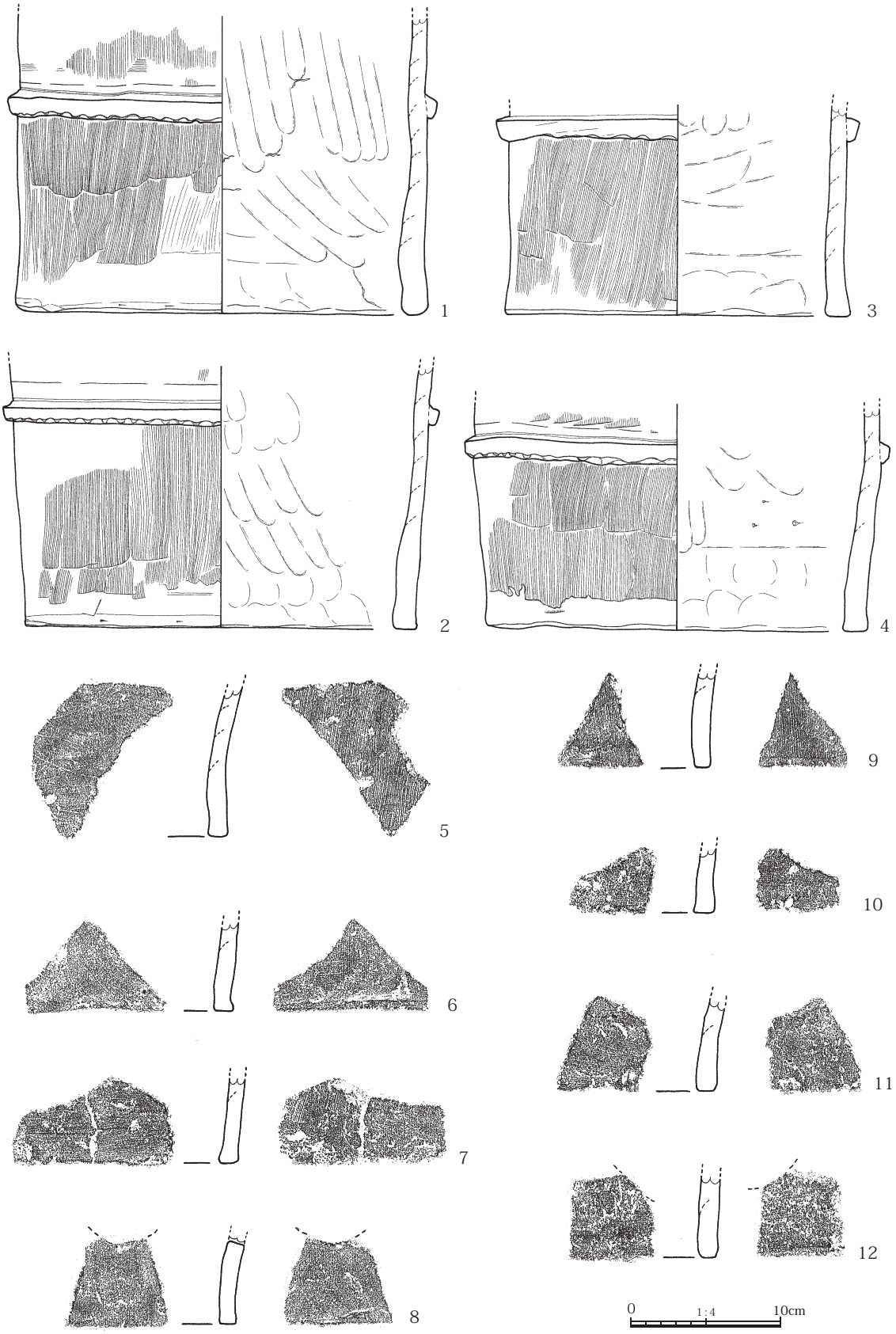
内面には基部製作時のものと思われる手掌痕がみられる。第１条突帯の端面は平滑であり、突帯を接着する際に板によって押圧していたものと考えられる。突帯を板押圧によって接着した後に突帯を調整するナデもほどこされているが、下辺についてはそのナデが及んでおらず、板押圧とともにおこなった指による押圧の痕跡が明瞭に観察できる。なお、突帯設定の工具痕と考えられる痕跡が第１条突帯の上辺や底面付近の外面にみられる。第１段の外面調整は基本的にタテハケで一部に板ナデ状になっている箇所を確認できる。第２段はタテハケの後のヨコハケを僅かに確認できる箇所がある。内面調整はナデである。底面には製作時に敷かれていたと思われる禾本科植物の痕跡が僅かに確認できる。

２は僅かに第２段まで残存しており、底部付近の残存率は約８割である。底径は 25.8㎝で、第１段高は 14.5㎝である。基部はおそらく２枚の粘土帯によって成形されていたものと推測され、基部内面には基部製作時のものと思われる手掌痕がみられる。第１条突帯は小振りで、その端面は平滑である。おそらく、突帯を接着する際に板によって押圧していたものと考えられる。突帯を板押圧によって接着した後に突帯を調整するナデもほどこされているが、下辺についてはそのナデが及んでおらず、板押圧とともにおこなった指による押圧の痕跡が明瞭に観察できる。なお、突帯設定の工具痕と考えられる痕跡が第１条突帯の上辺や底面付近の外面にみられる。外面調整はタテハケであるが、第１段ではあまり高さの間隔を離さずに複数回ほどこされている点が特徴的である。内面調整はナデであるが、突帯付近では突帯貼付にともなう指頭痕がみられる。

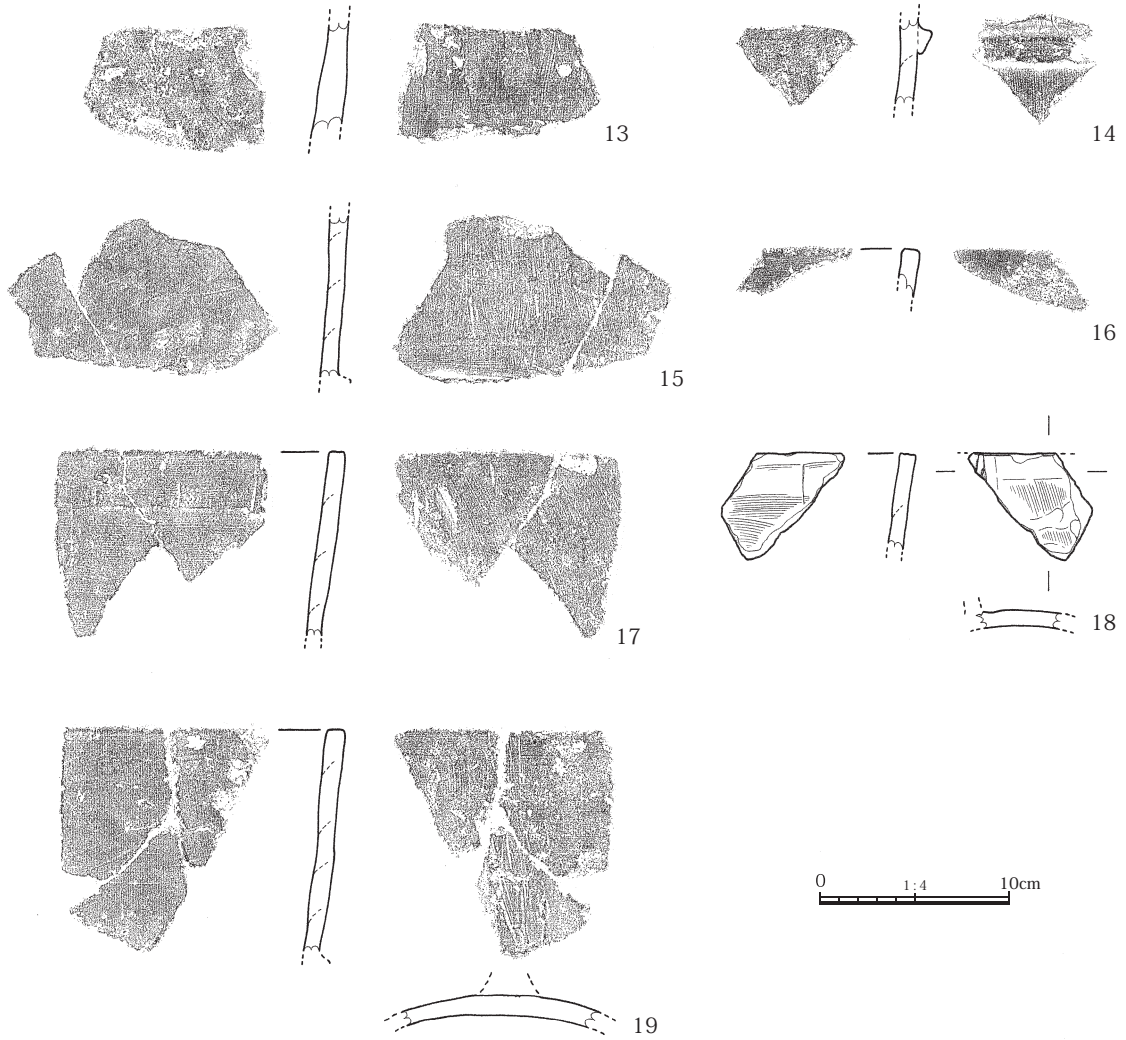
３は第１条突帯まで残存しており、底部付近の残存率は２割弱ほどである。底径は 22.6㎝で、第１段高は 12.8㎝である。基部内面には基部製作時のものと思われる手掌痕がみられる。第１条突帯の端面は平滑であり、板押圧によって接着した後に突帯を調整するナデがほどこされたようである。このナデは突帯の下辺には及んでおらず、板押圧とともにおこなった指による押圧の痕跡が明瞭に観察できる。なお､突帯設定の工具痕と考えられる痕跡が第１条突帯の上辺にみられる。外面調整はタテハケで、内面調整はナデである。底面には製作時に敷かれていたと思われる禾本科植物の痕跡が確認できる。

４は僅かに第２段まで残存しており、底部付近の残存率は約９割である。底径は 25.0㎝で、第１段高は 12.5㎝である。基部はおそらく２枚の粘土帯によって成形されていたものと推測され、基部外面には製作台の木目痕らしきものも観察できる。第１条突帯の端面は平滑であり、突帯を接着する際に板によって押圧していたものと考えられる。突帯を板押圧によって接着した後に突帯を調整するナデもほどこされているが、下辺についてはそのナデが及んでおらず、板押圧とともにおこなった指による押圧の痕跡が明瞭に確認できる。外面調整は第１段、第２段ともにタテハケであるが、あまり高さの間隔を離さずに複数回ほどこされている点が特徴的である。内面調整は基本的にナデであるが、板ナデのような痕跡を観察できる箇所がある。なお、内面の基部付近では基部粘土帯作成時のものと思われる手掌痕や指頭痕がみられる。

５～ 12 は底部を含む細片である。５は外面調整がタテハケで、内面調整が左上もしくは左下方向のナデである。６は外面の最下部に横方向の擦痕がみられる。おそらく突帯設定工具によるものと考えられる。外面調整はタテハケで、内面調整は左上方向のナデである。７は外面調整のタテハケがあまり及んでおらず、僅かに確認できる程度である。内面調整は横方向のナデである。８は外面最下部に横方向の擦痕がみられる。おそらく突帯設定工具によるものと考えられる。外面調整はタテハケで、内面調整



第 157 図　円筒埴輪実測図（1）



第 158 図　円筒埴輪実測図（2）

は基本的に縦方向のナデであるが、一部に横方向のハケにもみえる痕跡を確認できる。内面下部には手掌痕も残存している。第 1 段には透孔が穿たれていたようで、その形状は円形もしくは半円形になるものと思われる。9 は外面の最下部に横方向の擦痕がみられる。おそらく突帯設定工具によるものと考えられる。外面調整はタテハケで、内面調整は縦方向のナデである。10 は外面の最下部に横方向の擦痕がみられる。おそらく突帯設定工具によるものと考えられる。外面調整はタテハケで、内面調整は横方向のナデである。11 の外面調整はナデで、一部にハケがみられる。内面調整は左方向のナデである。12 は内外面ともに摩滅しており、調整方法は不明である。第 1 段には透孔が穿たれていたようで、その形状は円形もしくは半円形になるものと思われる。

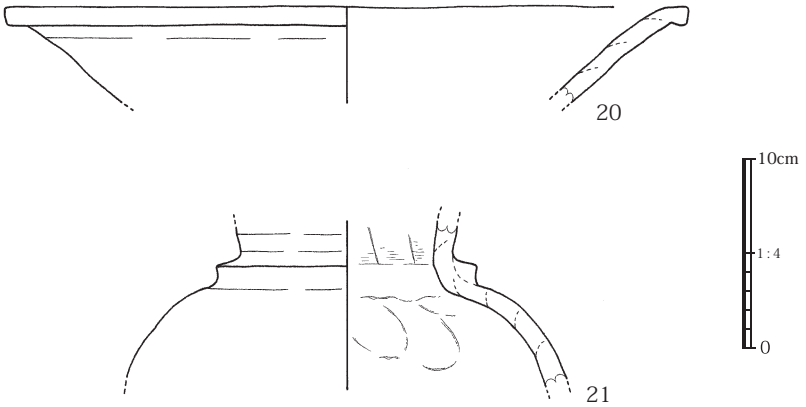
13 ～ 15 は胴部の破片である。13 は天地があまり判然としない。外面調整はタテハケで、内面調整は左上方向のナデである。14 は突帯を含む破片で、突帯が平滑で板による押圧によって接着したようにみえることから、この突帯はおそらく第 1 条突帯と考えられる。突帯を板押圧によって接着した後に突帯を調整するナデもほどこされているが、下辺についてはそのナデが及んでおらず、板押圧とともに

おこなった指による押圧の痕跡が明瞭に確認できる。外面調整はタテハケで、内面調整は縦方向のナデである。15 は天地があまり判然としない。現状での外面下部には突帯貼付にともなう横方向のナデがみられる。外面調整はタテハケで、内面調整は右上方向のナデである。

16 ～ 19 は口縁部を含む破片である。口縁部の形状はいずれも同様で、直立している。17・18 は同一個体である可能性が高い。17 は突帯貼付にともなう横方向のナデがみられないので、突帯間隔のわかる資料がないものの、おそらく口縁部高は突帯間隔よりも短くなることはないものと思われる。外面調整はやや左に傾いたタテハケで、内面調整は横方向のハケである。内外面ともに口縁端部付近は横方向のナデがみられる。18 は鰭が剥離した痕跡の残る破片である。外面左端に縦方向のナデとそれに平行した剥離痕があり、その剥離箇所には線刻がみられることから、これは鰭が剥離したものと判断される。これらのことから鰭の上端は口縁端部と同じ高さであったものと考えられる。外面調整はやや左に傾いたタテハケで、一部にナデもみられる。内面調整は横方向のハケである。内外面ともに口縁端部付近では横方向のナデがみられる。19 も 18 と同様、鰭が剥離した痕跡の残る破片である。鰭の剥離した箇所にはかなり浅い縦方向の線刻が不規則にほどこされている。外面調整はタテハケの後に一部で横方向のナデがみられる。外面の下部はほどなく突帯がくるものと考えられることから、口縁部高は 12.5㎝程度であったものと推測される。内面調整は横方向のナデである。内外面ともに口縁端部付近では横方向のナデがみられる。

②朝顔形埴輪（第 159 図）

20・21 は朝顔形埴輪と考えられる破片であるが、壺形埴輪となる可能性もある。20 は口縁部の破片である。口径は 36.1㎝で、内外面ともに摩滅していて調整方法は判然としないが、外面についてはナデのようにもみえる。21 は頸部から肩部にかけての破片である。頸部には断面形状が三角形となる突帯が貼り付けられている。肩部の外面調整は一部にハケがみられ、内面調整はナデで一部に接合痕が残存している。頸部の内面は摩滅しているものの、横方向のハケが観察できる。



第 159 図　朝顔形埴輪実測図

3　形象埴輪類

発掘報告によれば形象埴輪類の破片は竪穴式石槨上付近の盗掘による攪乱層内から出土したようであるが、今回報告する破片全てがそこから出土したものかは不明である。

①家形埴輪（図版 185・186、第 160 ～ 162 図）

家形埴輪は少なくとも 2 個体以上存在していたものと考えられる。

22 ～ 24 はそのうちの 1 個体である。切妻造の家形埴輪で平側の破片（22･23）と屋根部の破片（24）を確認できる。この個体の特徴は屋根部の平側の軒先付近に横方向の平行線が 2 本線刻され、さらにその 2 本の内側に縦方向の線刻が連続してほどこされていることである。

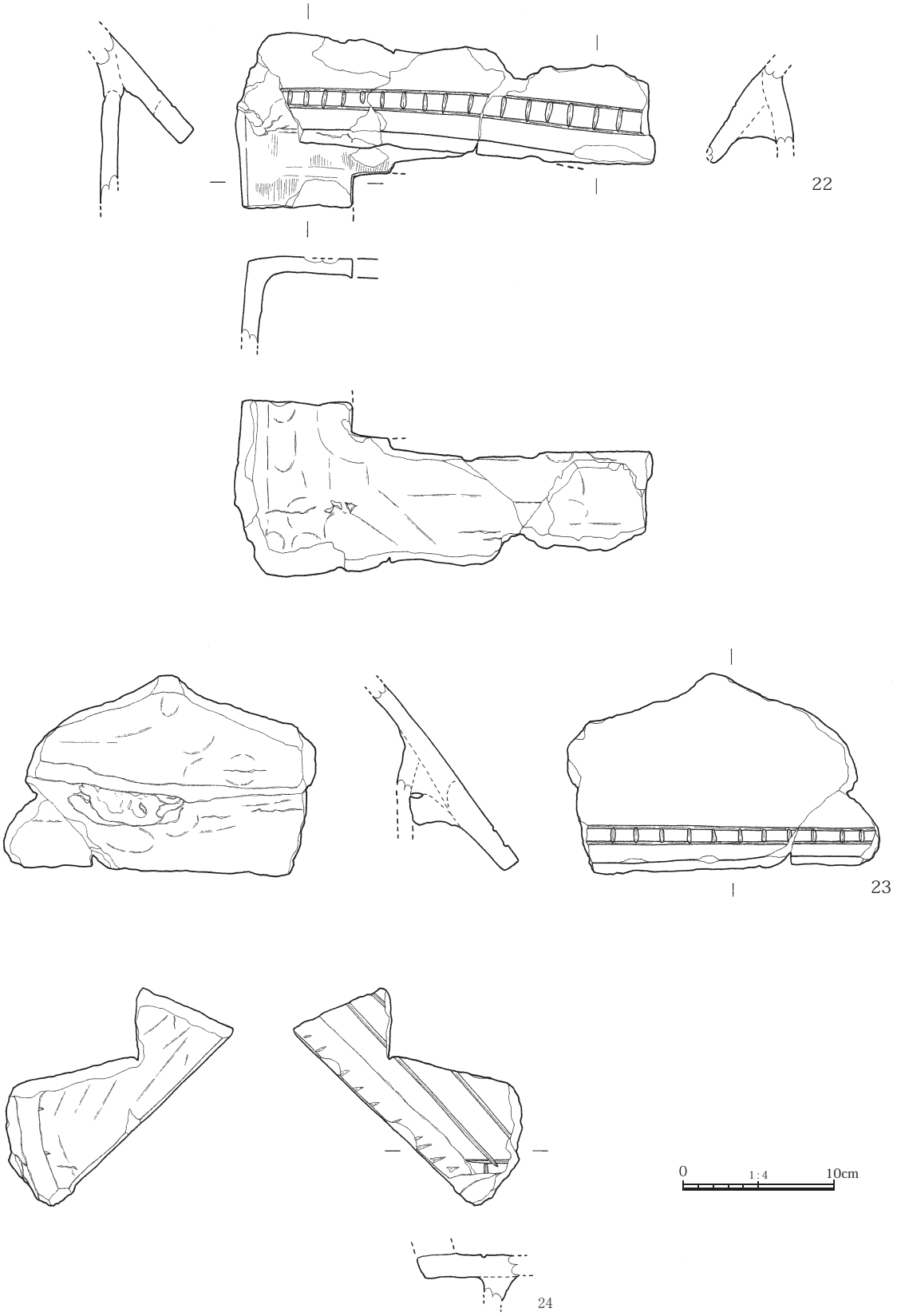
22 は平側の屋根部から壁部にかけての破片で、壁部には窓となる方形の透孔もみられる。壁部の外面はハケで調整されていたようである。この個体は壁部の粘土を積み上げた後に屋根部を成形し、その後に屋根部の軒先部分を粘土板の貼り付けによって成形したようである。この軒先部分の粘土板を貼り付ける際には部分的に壁部との隙間に粘土塊を補充しており、おそらく補強用のものと推測される。こうした粘土塊は 23 でも同様の箇所にみられる。22 の屋根部分の外面では黒斑にもみえる黒色のシミ状のものが確認できる。発掘報告では家形埴輪の破片が黒色の有機質が混在する攪乱層から出土したとあるので、この黒色の有機質が沈着したものかもしれない。24 は屋根部の破風周辺の破片であるが、破風は剥離している。剥離面には接着を強めるためにほどこされたと考えられる刻み目がみられる。

25・26 は 22 ～ 24 とは異なる切妻造の家形埴輪の個体である。この個体の特徴は、屋根部の平側の軒先付近に横方向の平行線が 2 本線刻されているが、22 ～ 24 とは異なりその 2 本の内側に縦方向の線刻がみられないことである。

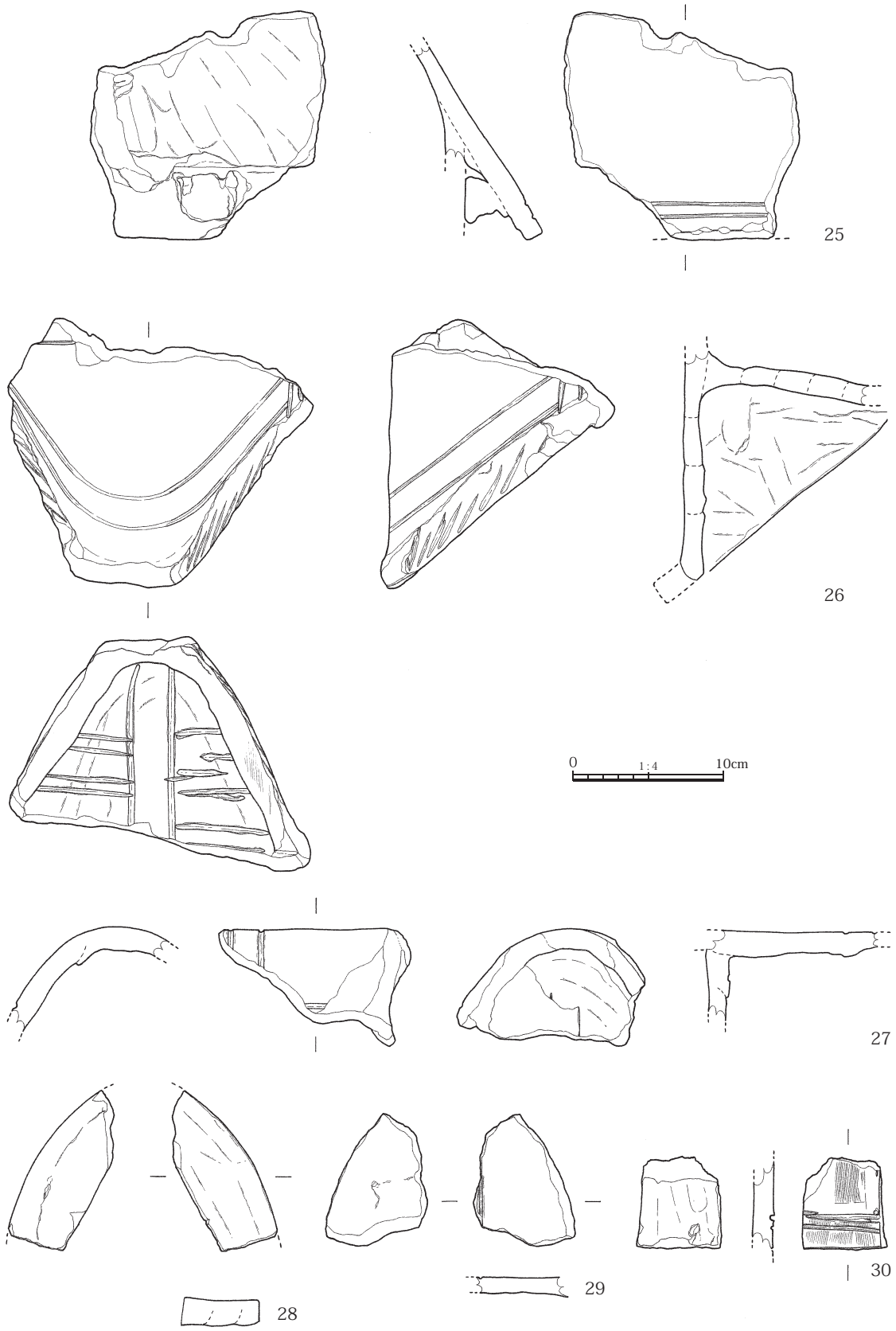
25 では 22・23 と同様に軒先部分の粘土板と壁部との隙間に粘土塊を補充して補強をほどこしていることが観察できる。26 は妻側の屋根部と壁部の破片である。破風は剥離しており、その剥離面には接着を強めるためにほどこされたと考えられる刻み目がみられるが、24 と比べると刻み目は長くなっている。屋根の棟部分に剥離痕などはなく、鰭飾りなどの装飾はほどこされていなかったようである。妻側の壁部には線刻で部材の表現がなされるとともに、塗布された赤色顔料が残存している。

27 ～ 34 は家形埴輪の破片であるが、上述した 2 個体との関係は不明である。同一個体である可能性もあるが、そうでない可能性もある。27 は妻側の壁部上部や屋根部を含む破片である。28 は剥離した破風の破片と考えられる。この破風については粘土紐を何度か接合して成形していることが断面の観察からわかる。29 は妻側の壁部上部の破片である。外面の左側で縦方向の線刻がみられる。30 は壁部の破片である。縦方向・横方向の線刻がほどこされている。外面にはハケによる調整がほどこされており、塗布された赤色顔料が残存している。

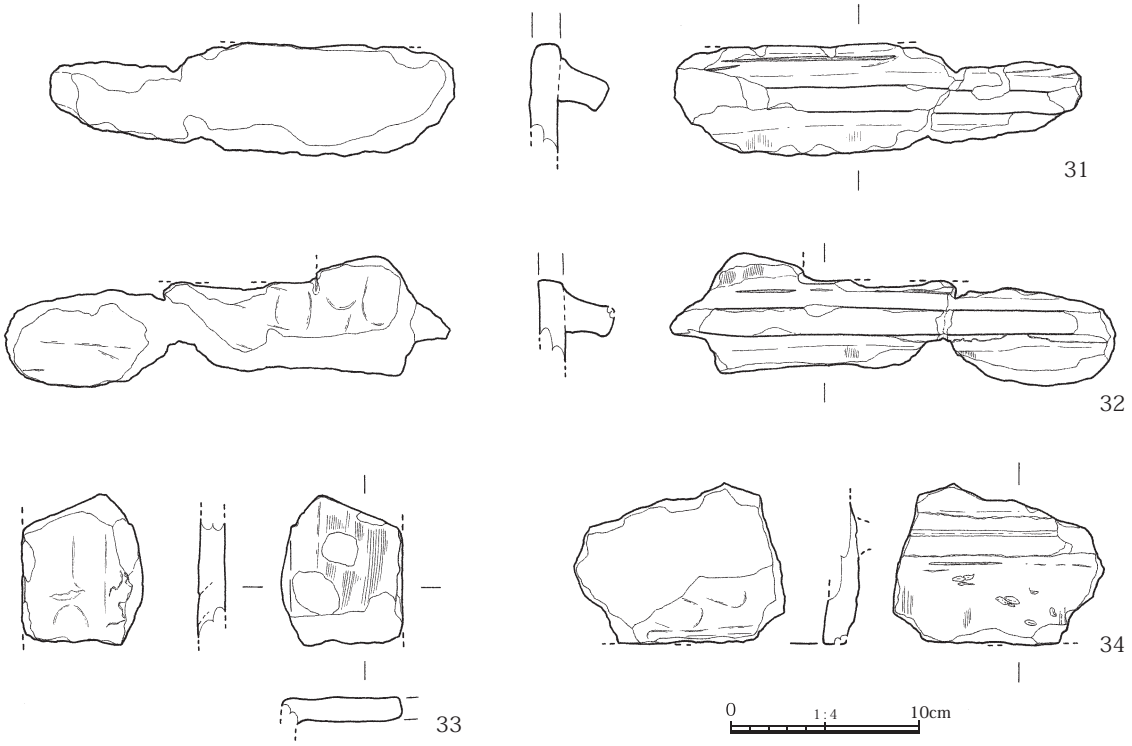
31・32 は同一個体である可能性が高い。どちらも平側の壁部の下方にある裾廻りの突帯や窓となる方形の透孔を含む破片である。31 の外面の裾廻り突帯の下部には僅かにハケが残存しており、壁部にはハケ調整がほどこされていたものと考えられる。このことは裾廻り突帯の上部においてハケ工具と思われる工具の当たった痕跡が残存していることからも首肯される。32 は内面で接合痕を確認できるこ



第 160 図　家形埴輪実測図（１）



第 161 図　家形埴輪実測図（2）



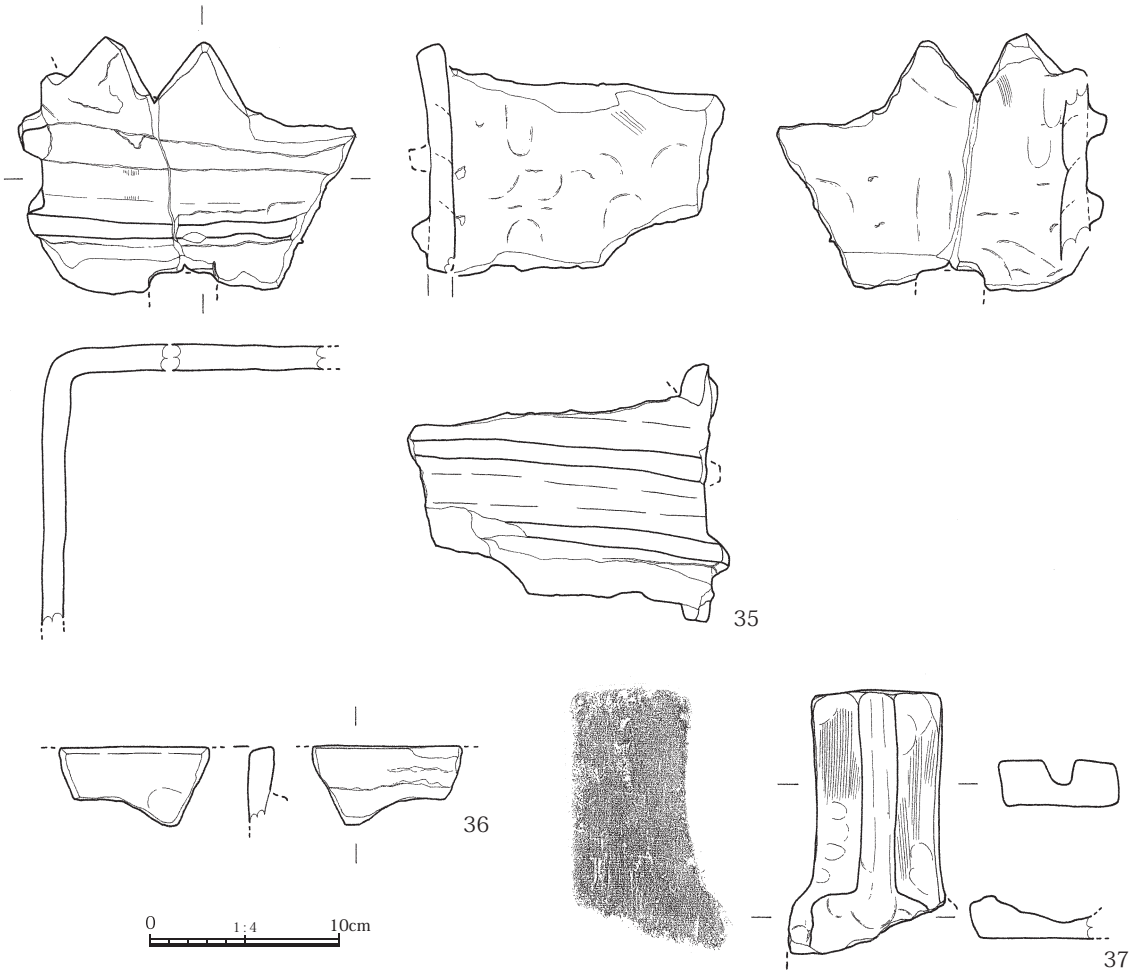
第 162 図　家形埴輪実測図（３）

とから、壁部は粘土紐を積み上げることによって成形されていたことが推測される。33 は壁部の角となる破片である。外面にはハケによる調整がほどこされている。34 は壁部の底面を含む破片で、裾廻り突帯が剥離している。その剥離面には横方向の沈線が確認できるが、この沈線が裾廻り突帯の貼り付け位置の設定用であるのか接着を強めるためのものであるのかは不明である。

②囲形埴輪（図版 186、第 163 図）

35・36 は囲形埴輪となる可能性がある破片である。35 は平面形が方形を基調とし、近接する２条の突帯や上部に連続する三角形の突起があることから囲形埴輪の破片であることは確実である。三角形の突起が残存している部分の下方には出入口になると考えられる方形の透孔がみられる。三角形の突起はこの出入口の上のみに存在していたわけではなく、現状では欠落してしまっているものの、全周していたものと推測される。内外面の調整は基本的にナデであるが、部分的にハケが残存している。また、内面には接合痕が残存しており、その様子からこの囲形埴輪は粘土紐を積み上げて成形されていたものと推測される。

36 は囲形埴輪の破片となる可能性があるものである。実測図の上端は生きており、外面の下部には突帯が剥離した痕跡を確認できる。天地が逆で、家形埴輪の破片となる可能性も考えられるが、実測図で上端となっている部分は、底面となりそうな雰囲気ではない。突帯剥離面の様子は 35 と類似しているが、35 は三角形の突起が全周していたと考えられるので同一個体とはならない。囲形埴輪が複数個体存在していた可能性も考えられる。



第 163 図　囲形埴輪および木樋・木槽形土製品実測図

③木樋・木槽形土製品（図版 186、第 163 図）

37 は囲形埴輪の内部に設置されていたと考えられる木樋や木槽をかたどった土製品である。上面はハケの後にナデ調整がほどこされている。樋となる部分ではナデや指頭痕が確認できる。樋の部分と槽の部分の境界には特に明瞭な段差などはないものの、槽の部分が若干深くなっている。槽の部分にはケズリやナデがほどこされている。側面はケズリのようにもみえる調整の後にナデがほどこされている。下面には製作台の痕跡にもみえる痕跡が残存しているが、その痕跡には単位があるようにもみえるので何らかの工具痕である可能性もある。

35 ～ 37 の出土位置に関する情報は残っていないが、形象埴輪が竪穴式石槨上付近の盗掘による攪乱層内から出土したとする発掘報告の記載がこれらの個体にも該当するとすれば、これらが設置されたのは墳頂平坦面ということになる。前方後円墳における囲形埴輪の設置状況と比較すると状況がかなり異なることとなり興味深い。（加藤一郎）

五條猫塚古墳の研究

報告編

発行年月日　2014（平成 26）年 3 月 31 日

発　　行　奈良国立博物館
〒 630-8213　奈良市登大路町 50 番地
TEL　０７４２－２２－７７７１

印　　刷　株式会社　天理時報社
〒 632-0083　天理市稲葉町 80 番地